

# 『制服と心の性』

朗読者 尾木直樹

17

私は長年学校教育に関わってきた身として、現在学校が抱えている様々な課題について考えることがあります。

例えば「制服」。今日は「学校の制服」について一緒に考えてみましょう。

18

現在、中学や高校の制服の多くが、男子と女子ではつきり区別されていますね。しかし、「女の子はスカート、男の子はズボン」という校則やこれまでの慣習がLGBT・性的マイノリティの子どもたちを苦しめる原因になっているのです。

19

例えば、「身体は女の子だけど、心は男の子」という子は、スカートをはいたとたんに拒否反応から身体が動かなくなる場合もあるのよ。制服のせいで不登校になってしまいう子もいるの。これは無視できない問題よね。

20

性別に違和感を感じている子どもたちの声に耳を傾け、自分が自認する性別の制服が選べるような対応を、これからの学校はしていくべきではないかな、と思っています。

「福岡市の制服を考える会」では、「制服は心の性で選ばせて」と呼びかけています。元小学校の先生や弁護士、高校生たちが集まってつくった会で、制服の悩みや、それをどう乗り越えて

きたかを話し合っているの。

会に参加した高校三年生の子は、体は女性で心は女性でも男性でもない。だからセーラー服を着ることがイヤでイヤで、ジヤージーで通い始めたら先生たちから厳しく指導されたそうよ。別の子は体が女性で心は男性。中学生の時にセーラー服じゃなくて学生服を着たいと学校に訴えたけどかなわなかったの。

文部科学省が平成二十五年（二〇一三年）に行った調査では、全国の小中高校で、自分の性別に違和感がある子どもに対して特別な配慮をしているのは全体の六割で、制服や体操服を自分で選べるようにするなど、服装についての配慮をしている学校もあります。文部科学省は性的マイノリティの生徒への配慮や支援をするように呼びかけています。

こうした動きを受け、学校現場も変わり始めています。福岡市などの教育現場では、制服問題を入り口に、性的マイノリティについてしっかりと受け止めていこうという動きが出てきているそうです。

「制服も、心の性で選びたい」。

そんな子どもたちの叫びに耳を傾け、制服のせいで学校に行けなくなったという子をなくしたい。それは、子どもたちの学ぶ権利を守ることにもつながるのですから。